

1. 縄文時代の遺跡から出土する栽培植物

1) 本州では縄文時代早期から

これまでは福井県鳥浜貝塚の前期初頭の遺物包含層から出土した大陸起源のヒョウタン、アサ、ゴボウ、シソ、エゴマ、小豆が最も古い栽培植物とされてきたが、最近になって滋賀県栗津湖底遺跡の早期末の層準からヒョウタン、エゴマ、アサが出土したことが報告され、さらに古い時代から栽培植物が利用されていたことが明らかになっている。

本州北端の青森県三内丸山遺跡の前期中葉から中期中葉の遺物包含層からもヒョウタンとその仲間であるユウガオ、ゴボウといった栽培植物が出土している。前期から晩期の遺物包含層からはソバ属花粉が検出され、なかでも晩期になるとソバ属花粉が出土する遺跡数が 10 遺跡と増加し、ソバが九州から本州北部までの各地で栽培されていたことも明らかになっている。

2) 北海道では縄文時代前期末から

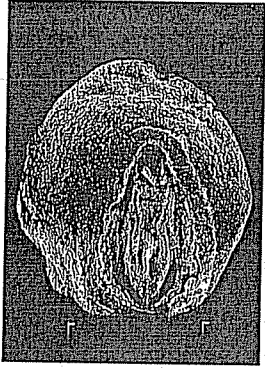
北海道では縄文時代前期末の南茅部町ハマナス野遺跡から出土した一粒のソバが最も古い大陸起源の栽培植物である。その後、後期中葉の忍路土場遺跡からソバ属花粉、シソ属、ゴボウが、後期中葉から末葉の苫小牧市柏原 5 遺跡と千歳市キウス 4 遺跡、晩期の札幌市 N30 遺跡からアサが出土する。

ソバ属花粉は晩期の奥尻町東風泊遺跡と千歳市ママチ遺跡からも検出され、本州で出土した大陸起源の栽培植物が北海道まで伝播していたことを物語っているが、その北限は縄文時代をとおして東北地方北部と土器文化圏を共有してきた石狩低地帯で、以北の遺跡から栽培植物は出土していない。栽培植物が出土する遺跡数は少なく、つくられた作物の種類も少ないが、縄文時代に北海道でも植物が栽培されていたことを示している。

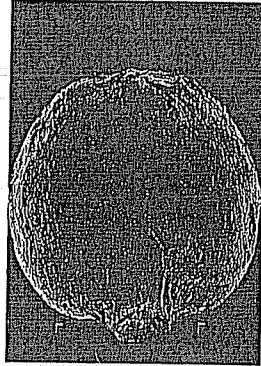
ソバやシソといったいわゆる照葉樹林帯を起源としたものは本州を經由して伝播してきた可能性が強いが、アサやゴボウといったナラ林帯を起源としたものは沿海地方からサハリンを經由して渡来していた可能性がのこされている。縄文時代後期中葉の船泊上層式土器は北海道一円に分布するのみならず、サハリン南部までその分布域を拡大しており、その際に大陸の集団と接触しアサ、ゴボウといった植物が北から入ってきた可能性がある。

ソバについても大陸沿海地方から日本海をとおって日本列島に渡来した植物であるとされていた時期があった。しかし、今のところ沿海地方の遺跡から出土するのは渤海の遺構からのものが最も古く、それ以前の遺跡ではその痕跡を発見することはできず、沿海地方からの渡来については否定的である。

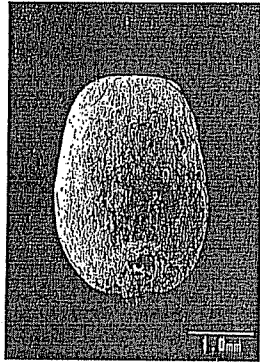
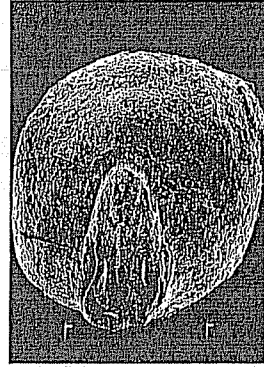
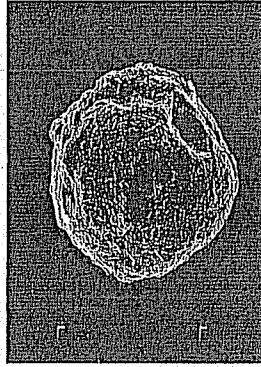
日本へのソバの渡来ルートについては Murai and Ohnishi (1995) が、アジア各地から収集した 29 の在来品種から DNA をとりだし、RAPD マーカーの比較を基に集団間の遺伝的距離から系統樹を描き、起源地の中国雲南省から中国北部をへて、朝鮮半島を經由して日本に至った伝播ルートを明らかにしている。



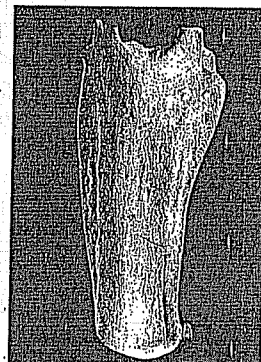
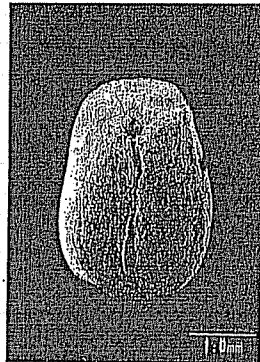
サクシュコトニ川遺跡出土キビ



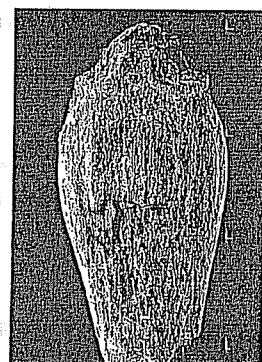
香川6遺跡出土アワ



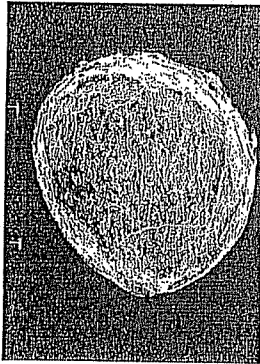
サクシュコトニ川遺跡出土コムギ



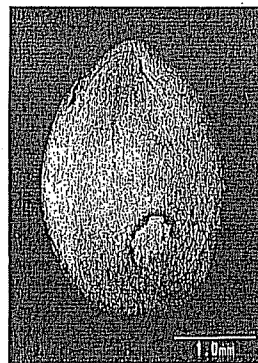
オオムギの穂軸



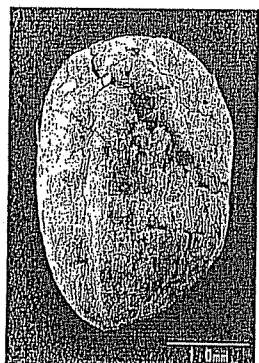
コムギの穂軸



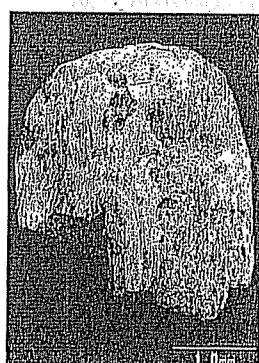
若月遺跡出土シソ属



サクシュコトニ川遺跡出土アサ



サクシュコトニ川遺跡出土コメ



サクシュコトニ川遺跡出土アズキ

擦文時代の遺跡から出土した主な栽培植物

土するオオムギの形態が異なる。石狩低地帯以南から出土するオオムギは、細くて長く、長さ／幅の値が 1.85 ～ 2.2 の皮ムギで、関東・東北地方の平安時代の遺跡から出土する、長さ／幅の値が 1.85 ～ 2.38 の皮ムギと同様の形態を示し、以北の遺跡からのものは短くて幅が広く、長さ／幅の値が 1.34 ～ 1.6 の裸ムギで、石狩低地帯以南のオオムギを「普通種オオムギ」、以北のオオムギを「擦文オオムギ」と仮称してきた。擦文時代および関東・東北地方の平安時代の遺跡から出土したオオムギの計測平均値と長さ／幅の値は第 2 表、第 2 図のとおりで、「普通種オオムギ」はそのルーツを本州東北地方に求められたが、「擦文オオムギ」についてはそのルーツが不明な状態が続いていた。

3. オホーツク文化期の栽培植物

5, 6 世紀頃から 9 世紀末にかけて、北海道のオホーツク海沿岸では、海獣狩猟・漁労・狩猟を生業としたオホーツク文化が展開されていた。

開拓記念館では 1975 年から 1979 年までに、オホーツク文化期の網走市二ツ岩遺跡の発掘を行い 1 号から 3 号までの 3 軒の住居跡の発掘を行っている。その中の 2 号住居の発掘に際して、五角形の住居南側につくられた骨塚の土壌が採取され、フローテーション作業が行われた。当時の状況はオホーツク文化の集団と栽培植物は無縁と考えられていた頃で、得られた資料は約 10 年ほどそのままの状態 で保管されていた。

その後開拓記念館では鉄と農耕を主題として、やはりオホーツク海沿岸に分布する擦文時代後半期の雄武町雄武堅穴群遺跡の発掘を行い、住居の床面全てから土壌試料を採取しフローテーション作業を行い、擦文文化期におけるオホーツク海沿岸での雑穀農耕の確認作業を行っていた。

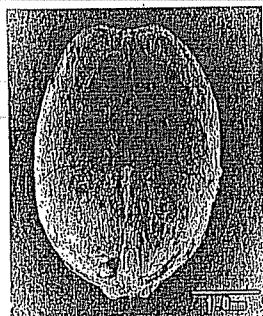
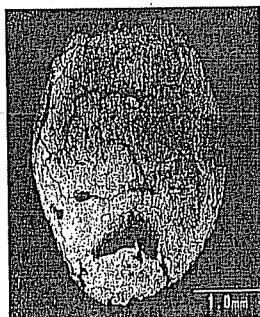
二ツ岩遺跡の試料を観察したのはその時で、その際にオオムギ 31 粒、アワ 2 粒、キビ粒と、アカザ属、マタタビ属、エゾニワトコ、ヤマブドウ属の種子、オニグルミ堅果皮片、ヤマブドウ属果皮などが抽出された。二ツ岩遺跡から出土したオオムギの平均値は長さ 4.29mm、幅 2.93mm、厚さ 2.38mm で、長さ／幅の値が 1.46 の裸ムギで、「擦文オオムギ」の範疇に含まれるもので（山田他、1989、1991）、

その後、オホーツク文化の枝幸町目梨泊遺跡 4 号住居からオオムギ（長さ／幅の値 1.51）、アワ、キビ（吉崎、1994）、雄武町オウム堅穴群遺跡 1 号住居からオオムギ（長さ／幅の値 1.35）、キビ（山田、1995）、湧別町川西遺跡からもオオムギ、アワ、キビ（吉崎、1995）の報告がなされ、オホーツク文化期の集団がオオムギ、アワ、キビを利用していたことが明らかとなった。いずれの遺跡でもオホーツク文化の住居の骨塚、もしくは骨塚があるべき場所から多く出土しており、儀礼的に用いられていた可能性が強い。

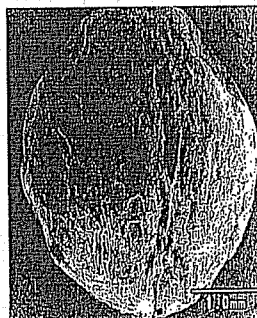
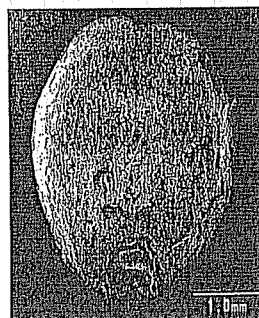
8 世紀から 9 世紀にかけた 4 遺跡から出土したオオムギはいずれも「擦文オオムギ」の範疇に含まれる裸ムギであったが、この時点ではまだ「擦文オオムギ」のルーツは不明であった。

4. 大陸沿海地方から出土した雑穀

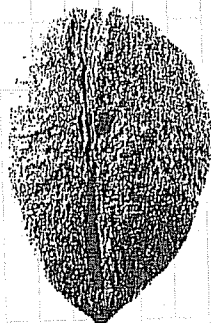
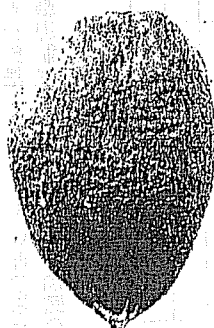
大陸沿海地方の遺跡から州土する雑穀について不明な状態であった。しかし、Yanushevich（1990）によって沿海地方の遺跡から出土した雑穀についての報告があり、金時代のシャイギン・ガラディシュとアナニエフ・ガラディシュから出土したオオムギの



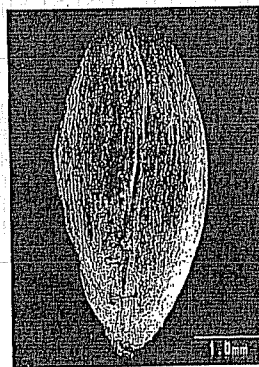
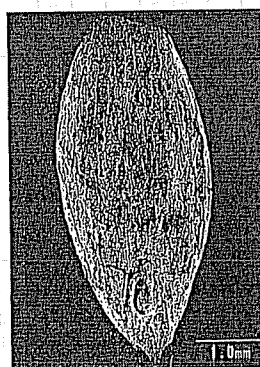
網走市二ツ岩遺跡出土オオムギ



若月遺跡出土オオムギ

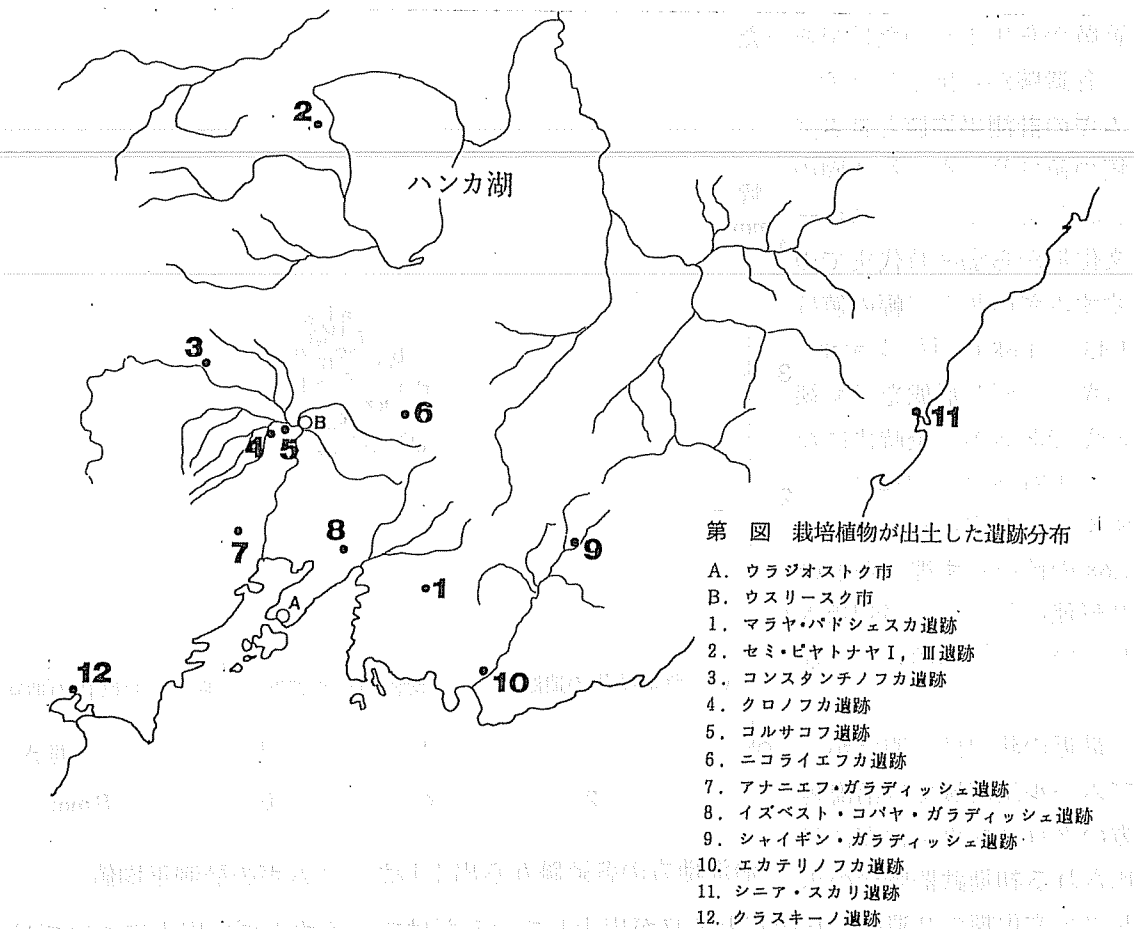


マラヤ・パドジェスカ遺跡出土のオオムギ



サクシュコトニ川遺跡出土オオムギ

「普通種オオムギ」、「擦文オオムギ」とロシア沿海地方から出土したオオムギ



計測値に「擦文オオムギ」の計測値に類似した数値が報告され、沿海地方の雑穀について調査する必要が生じた。

1993 年 8 月から 10 月はじめまでウラジオストク市のロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所に滞在して、同研究所に保管されている沿海地方の初期鉄器時代から金時代までの遺跡から出土した雑穀について調査する機会に恵まれた。

同研究所に保管されていた栽培植物は第 3 表に示したとおり 17 遺跡から出土した(第 3 図)、オオムギ、コムギ、キビ、アワ、ヒエ、ソバ、小豆、エンドウ豆、エゴマ、アサ、ライムギ、モロコシ、ベニバナの 13 種類の雑穀類であった。エンドウ豆とライムギを除けば北海道の擦文時代の遺跡から出土した雑穀類と同様の構成である。

オオムギについては初期鉄器時代前期ヤンコフスキー文化期のマラヤ・パドシェスカ遺跡から金時代のアナニエフ・ガラディッシュエまでの 16 遺跡から出土しているが、計測可能なものは 8

第 4 表 沿海地方の各遺跡から出土したオオムギの計測平均値一覧(単位 mm)

遺 跡 名	長さ	幅	厚さ	長さ/幅
a. マラヤ・パドシェスカ	5.04	3.36	2.54	1.5
b. クロノフカ	4.45	3.1	2.3	1.43
c. コルサコフ	4.2	2.5	1.8	1.68
d. セミ・ピヤトナヤ I	4.2	2.9	2.33	1.44
e. シニア・スカリ	5.22	3.28	2.41	1.59
f. コンスタンチノフカ	4.9	3.23	2.61	1.51
g. イズベスト・コバヤ(カマ)	4.96	2.66	2.21	1.86
h. イズベスト・コバヤ(土器下)	5.46	3.19	2.59	1.71
i. イズベスト・コバヤ(土器下)	5.13	3.36	2.62	1.52
j. アナニエフ 20号住居	4.9	3	2.3	1.63
k. アナニエフ 34号住居	4.68	2.77	2.14	1.68
l. アナニエフ 37号住居	5.29	2.93	2.18	1.8
m. アナニエフ 47号住居	4.98	3.2	2.44	1.55
n. アナニエフ 56号住居	5.01	2.66	1.96	1.88
o. アナニエフ 67号住居	5.1	2.4	1.8	2.12
p. アナニエフ 71号住居	4.78	2.54	1.98	1.88
q. アナニエフ 90号住居	5.14	3.31	2.5	1.55

ではなく、オホーツク文化期のすべての時期に普遍的にみられるものでもない。天野(1994)は、帯飾や銚などの大陸製品がもたらされた時期はきわめて限られ、その時期は7世紀頃と求められると指摘している。また、7世紀頃のオホーツク文化刻文期の遺跡から栽培植物の出土は報告されていないが、大陸製品の出土例が多いこの時期に伝播してきた可能性が強い。

オホーツク文化の遺跡から出土した大陸製品の伝播ルートについて、アムール川河口からサハリンに渡り、サハリンを南下して北海道に伝播したと考えられてきた。しかし、サハリンから多くの大陸製品が出土せず、アムール川下流域やサハリンから穀物が発見されていないこと、針入れに描かれた舟などをもとにすると、日本海を直接横断した交易活動があったと考えることもできるが、当時のルートは不明である。

次いで問題となるのが伝播してきたオオムギなどの穀物が、彼等によって栽培されたか否かである。従来の見解どおりオホーツク文化の集団が農耕活動を全く行っていなかったとしたら、食用となって消化されてしまう穀物が8～9世紀にわたって継続的に持ち込まれていたことになる。約2世紀にわたって継続的に穀物が持ち込まれる接触があったならば、該当期の遺跡から出土する大陸製品は現状よりは多いはずである。しかし、現状は先に述べたとおりである。

当初は輸入食品としてもたらされた可能性が強いオオムギなどの穀物は、その有用性からオホーツク文化の集団のなかでの栽培化が始まり、発芽可能な状態で種子が保存されていたことにより、後に擦文文化の集団にもその栽培が受け継がれたものとする。

また、オホーツク文化の集団によった農耕に関する資料は乏しいが、目梨泊遺跡の土壌墓に副葬された鉄鎌、土壌墓の埋積土から検出されたソバ属花粉は農耕活動が行われていた可能性を示唆し、山浦(1982)の指摘にある骨鍬・骨斧も農耕用の土掘り具として利用された可能性を秘めている。

6. オホーツク文化は擦文文化と融合し吸収された

オホーツク文化の遺跡からは蕨手刀や土器などといった、本来は擦文文化の集団が使用していたはずの遺物が客体として出土するが、擦文文化の集団の集落がつくられた痕跡はみられず、擦文文化の集団がまだオホーツク海沿岸までは進出していなかったことを示している。また、10世紀以前の擦文文化の遺跡から裸性の「擦文オオムギ」は検出されていないことから、オホーツク文化が展開されていた頃にはまだオホーツク文化の集団の中でのみそれらの穀物が栽培されていただけであったと考えられる。

しかし、9世紀後半頃から擦文文化の集団は石狩低地帯以北や以東に進出をはじめ、9世紀末には道東ではオホーツク文化と擦文文化の融合が始まり、擦文文化に吸収されたトビニタイ文化が形成され、オホーツク文化は解体する(右代、1991)。オオムギをはじめとした穀物は、オホーツク文化が解体した10世紀頃になって道北・道東地方で擦文文化集団の作物セットのなかに取り込まれ、10～11世紀の香川三線遺跡、香川6遺跡、浜佐呂間I遺跡から「擦文オオムギ」が出土し始め、擦文文化が解体する13世紀頃まで石狩低地帯以北の地域で栽培が行われることになった。

沿海地方から伝播しオホーツク文化の集団に利用された「擦文オオムギ」をはじめとした穀物は、オホーツク文化と擦文文化との融合の過程で擦文社会のなかに取り込まれたの